

『過疎地の伝統芸能の再生を願って 現代民俗芸能論』

星野 紘 著

農業・農村領域 研究員 小柴有理江

評者は過疎・高齢化の深刻な地域に数年間居住する機会を頂いたことがあります。そこには多くの伝統文化が残っており、祭りや農耕儀礼、和太鼓など多彩な伝統文化に触れることができました。その内容は農山村と漁村では大きく異なっていましたし、集落間でも違いがあり、各々が立派で、大変興味深いものでした。またそれに付随する経済循環や世代間交流等がもたらす効果も地域社会にとっては見過ごせないものでした。しかし、近年では高齢化に伴い、そうした伝統文化の担い手が確保できず、簡素化や休止が相次いでいます。その一方で、Iターン者や地元の若者達は、その伝統文化に大変関心を持ち、年配者の教を乞いながら、その復活や伝承に奮闘していました。彼らがその地域で生きる誇りの象徴として、伝統文化があったように思います。前置きが長くなりましたが、こうした状況に接した者として、過疎地域での伝統文化の再生の方途を少しでも知りたいと思い、手にしたのが本書でした。

本書の著者は、文化行政に長年携わってきた民俗学者です。本書では伝統文化の中でも、地域の伝統芸能、特に神楽の伝承問題に焦点が当てられています。過疎・高齢化に伴う神楽の危機的な状況、それに対する各地での苦闘ぶりが描かれています。さらに同様の課題に直面する韓国、中国における無形文化財の保護政策の比較分析もなされています。以下、その内容の一端を紹介します。

著者は長野、岐阜、静岡、愛知の各県で独自に行ったアンケート調査から、現存している無形文化財のおよそ65%が伝承に課題を抱えていることを明らかにしています。集落の定住人口の確保が根本的な解決策ですが、それが簡単には叶わない中での、伝承をめぐる各地の粘り強い取組が紹介されます。

その方策の第1は、担い手不足を補うため、伝承対象者の枠の拡大、他出した住民の参加といった対

応です。これは既に多くの地域でとられている方策でしょう。さらには集落間での人材の相互補完、それでも不足する場合は愛好者なども受け入れながら継続を図っている場合もあるそうです。また集落

単位で集団移転した場合には、移転先で有志によって伝承されているケースがあることも紹介されています。なお、小中学校も重要な伝承の場ですが、それも学校の統廃合の進展により、集落単位での継承は難しくなっているようです。ある地域では、2段構えの伝承、すなわち複数集落に共通する共通譜を作成して基礎を習得し、その上で各集落の演じ方を個別に習得することを余儀なくされているそうです。

他方で、伝統文化を継承していくには集落内の合意形成も欠かせません。そのためのリーダーの役割や住民への細やかな配慮が必要な要素であると指摘されています。

本書には、こうした一進一退を繰り返す伝統文化の乖離（変容）と回帰（伝承）のプロセスが描かれています。伝統文化の伝承といっても、単にその技を受け継いでいくことだけではないことが分かります。地域としての伝承の仕組みづくり、またそれを現実に即して常に作りかえていくことに住民の主体性が込められていること、それを読み取ることの重要性が示唆されています。

このように本書は伝統文化がテーマとなっていますが、それに関わらず、地域社会のあり方に関心のある方にとっても広く参考になるでしょう。



『過疎地の伝統芸能の再生を願って
現代民俗芸能論』

著者／星野 紘
出版／2012年7月
発行所／国書刊行会